

## 平成25年度病害虫発生予察指導情報

対象病害虫：ダイズ害虫（No.1）（カメムシ類、ハスモンヨトウ、チョウ目害虫）

平成25年8月9日  
鳥取県病害虫防除所

### 1 情報の内容

8月9日現在、カメムシ類は、平年並の発生であったが、今後、発生に好適な気象条件が続くと予想されるため、カメムシ類の基幹防除を徹底する。

ハスモンヨトウの発生は平年よりやや多い。ハスモンヨトウによる被害は、8月中旬ころから白変葉が増加しはじめると予想されるため、早期発見・早期防除に努める。

チョウ目害虫の食害は、ほ場間差が大きいいため、各ほ場の発生状況をよく観察し、食害が多い場合は防除を行う。

### 2 発生状況

#### 【カメムシ類】

- (1) 8月7～9日に行った県内巡回調査（東部3地点、中部5地点、西部2地点）の結果、発生ほ場率は43.3%（平年値：40.5%）、25株当たり平均成幼虫数は0.8頭（平年値：0.9頭）で、平年並の発生であった。
- (2) 現在、ほ場ではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシの成虫、および若齢幼虫が発生している。

#### 【ハスモンヨトウ】

- (1) 8月7～9日に行った県内巡回調査の結果、発生ほ場率は50.0%（平年値：37.3%）、1a当たりの平均白変か所数は0.2か所（平年値：0.3か所）で、平年よりやや多い発生であった。
- (2) 現在、ほ場では若齢～老齢幼虫が発生している。
- (3) フェロモントラップの誘殺消長から、8月中旬頃に白変葉が増加し始めると予想される。

#### 【チョウ目害虫】

- (1) 発生ほ場率は100%、現在、ほ場では中齢～老齢幼虫が発生している。
- (2) 被害程度は、地域間差および、ほ場間差が非常に大きい。

### 3 防除上注意すべき事項

#### (1) カメムシ類

向こう1か月の気象予報から、本種の増殖に好適な条件が続くと予想されるため、下記を参考にして基幹防除を徹底する。なお、本種の防除は紫斑病との同時防除を原則とする。

#### ア 紫斑病に水和剤を使う場合

(ア) カメムシ防除にネオニコチノイド系又はフェニルピラゾール系殺虫剤を使用する場合

- ・開花期後30～35日（全体の花が終わった時期）の1回防除を基本とし、紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの2,000倍）とカメムシ防除剤（ダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤、キラップフロアブル2,000倍）の混用で100ℓ/10aの薬液を散布する。

なお、展着剤を必ず加用する。

- ・カメムシ類の発生が多い場合は、前回散布の10日後に、カメムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）を散布する。

(イ) カメムシ防除に上記以外の殺虫剤を使用する場合は、2回防除を基本とする。

- ・ 1回目：開花期後25～30日（全体の花が終わった時期）  
紫斑病防除薬剤（アミスター20フロアブルの3,000倍）とカメムシ防除剤（エルサン乳剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤等）の混用で、150～300g/10aの薬液を散布する。  
なお、展着剤を必ず加用する。
- ・ 2回目：1回目防除の10日後  
カメムシ防除剤（水和剤あるいは粉剤）

#### イ 紫斑病に粉剤を使う場合

- ・ 1回目：開花期後25～30日後 マネージトレボン粉剤DL
- ・ 2回目：1回目防除の10日後 トレボン粉剤DL、MR.ジョーカー粉剤DL等のカメムシ防除剤

#### (2) ハスモンヨトウ

- ア 向こう1か月の気象予報から、本種の増殖に好適な条件が続くと予想される。
- イ 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努める。発生初期の場合、葉の切除などの捕殺を行うか、農薬のスポット散布を行う。
- ウ 防除の目安は、1a当たりの白変か所数5か所以上とする。
- エ 新葉の出葉により、白変葉が確認されにくいほ場が多いので、観察にあたっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。
- オ 若齢幼虫に対する登録農薬の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が低下するため、散布適期を失しないようにする。なお、中齢～老齢幼虫が混在する場合は、ロムダン粉剤DL、ミミックジョーカー粉剤DL、ラーピンフロアブル、マトリックフロアブル、フェニックス顆粒水和剤、プレバソソフロアブル5等を散布すると、比較的效果が高い。

#### (3) チョウ目害虫

各ほ場の発生状況をよく観察し、発生が多い場合は、農薬使用基準に従って防除を行う。